

## 第 82 回日本整形外科学会学術総会 パネルディスカッション

## 「Spine Crossfire - 腰椎変性すべり症に対する固定」序文

清 水 克 時\*

このパネルディスカッションでは、腰椎変性すべり症に手術を行う場合、固定が必要かどうかという重要なテーマを議論した。腰椎変性すべり症の治療の基本は保存的治療である。手術は、保存的治療が無効な例に行われる。手術を行う場合、神経の除圧のみで良いのか、すべり椎間を固定する必要があるのかは論議の多いところである。すべりにより、もともと不安定性のある椎間を固定せずに除圧すると、さらに不安定性が増し成績が不良になると考えられる。Herkowitzらの前向き比較試験によって、L4-5 単椎間の変性すべり症に対しては、非固定よりも固定のほうが成績が優れていることが報告されている<sup>1)</sup>。しかし、固定術により合併症のリスクが高くなる。偽関節、内固定のトラブル、局所感染、固定隣接椎間の問題のほか、手術侵襲が大きくなることにより、全身合併症のリスクが増す。変性すべり症は高齢者に多いので、もともと糖尿病や心疾患などの内科的合併症を持っていることが多いため、高侵襲の手術にはリスクがある。骨粗鬆症によって内固定がむずかしかったり、罹患椎間以外の多椎間に変性があることで症状が残存するという心配もある。

福岡サンパレスの大ホールに満場の学会参加者が集まり、2つの講演と、それに続いて議論を行った。三楽病院の佐野茂夫氏、唐司寿一氏は固定派を代表し、「腰椎変性すべり症に対する矯正固定術の手技と有効性」について講演した。佐野氏、唐司氏はペディクルスクリューシステムと PLIF ケージを用い、椎間板高の開大とすべりの矯正を加えた corrective PLIF による治療成績を述べた。

川崎医科大学の長谷川徹氏は非固定派を代表して、「腰椎変性すべり症に対する非固定除圧術の検討」について講演した。低侵襲除圧術である片側進入両側除圧 (over-the-top laminoplasty: OTT) によって、不安定性の増加を抑えて除圧することができることを示し、その適応と限界を述べた。小さい侵襲で最大限の除圧を得ることにより、不安定性を増加させないというのがこの方法のコンセプトである。

討議の最初にアナライザーシステムをもちいて、座長が聴衆の背景調査をした。腰椎変性すべり症に手術を行った経験があるかどうかについては、大部分の聴衆が経験ありと回答した。手術に固定が必要、不要、どちらとも言えないの3択では、回答が約 1/3 ずつに分かれた。この問題がどちらとも結論しがたい現状を端的に示していると思われた。

このパネルディスカッションでは主に、初回手術に対する手術方法を論議した。除圧後に症状が再燃した場合の再手術を固定で行うか、非固定で行うか。また、固定隣接椎間障害の再手術の方法についてまでは議論できなかった。また、低侵襲の固定術の方向や、後方の motion preservation surgery についても議論の余地がある。このパネルディスカッションによって、固定が必

\*岐阜大学大学院医学研究科整形外科

要か、不要かについては明確な結論が出せなかったが、固定、非固定のそれぞれの方法が抱える問題を明らかにすることができた。

文 献

- 1) Herkowitz HN, Kurz LT. Degenerative lumbar spondylolisthesis with spinal stenosis: A prospective study comparing decompression with decompression and intertransverse process arthrodesis. J Bone Joint Surg Am 1991; 73: 802-8.